

## 『觀無量壽經』の序分について

三 枝 樹 隆 善

およそ一つの著作において、その序文の占める位置は、はなはだ重要である。どんな書物でも、およそ序文をもたないものはない。序文というものは、例えていえば、われわれ人間の顔のようなものである。ある著者が一つの著作をする場合には、その序文に最大限の注意を拂うものである。それは、読者がその序文を読めば、その作者の意圖と著作の内容をはつきりと理解することができるからである。これと同じようなことが經典の場合についてもいえるのである。ところが經典の場合には、經典は一般の書物のように、序論、本論、結論という風にはつきりと區分されてはいない。そこで、後世の經典研究者は經典を解釋するときに、經典を理解しやすくするために勝手に經典そのものを、序分、正宗分、流通分という風に區分したのである。しかし、このような區分の方法が、作者の意圖に一致しているかどうかはなはだ疑問である。

ところで、ここに問題にしようとする『觀無量壽經』の序分の部分も、その作者が、はつきりと序分、正宗分、流通分という風に區分していないから、この經典の序分は、果してどこまでが作者の意圖した序分に相當するのであるかということが問題になる。後世の經典研究者が自分の主觀に基づいて、經典を區分するということになれば、經典の區分がそれぞれ異なつたものになることは當然のことである。このことは『觀無量壽經』の場合にも顯著に認められるのである。淨影寺慧遠、嘉祥寺吉藏、光明寺善導は、それぞれこの經典を註釋し、それぞれ異なつた立場からこの經典を分科しているが、その序分の部分の區分についての三者の見解ははなはだしく異なつていることが認められる。このような見解の相違はどうして起つたのであろうか。この點を明らかにしようとするのがこの小論の意圖するところである。

二

『觀無量壽經』一卷は、西曆四二四年(宋の元嘉元年)、西域から中國

の建鄴に來て、鐘山の道林精舎に住した沙門毘良耶舎 Karayasas によつて、元嘉年間（四二四〜四五三・暹良耶舎の没年は四四二）に翻譯されたと傳えられている。<sup>(1)</sup>この經典はいわゆる淨土三部經の一つに數えられる『無量壽經』とともに、中國において大いに流布し、人びとの信仰生活に大きな影響を與え、多くの學僧によつて研究講説され、ついに淨土教の主要經典として尊重されるに至つた。淨土教の主要經典の一つであるこの『觀無量壽經』はどの部分までが序分であり、またどうしてそこまでが序分と見なされたかという理由を理解しやすくするために、いささか冗長ではあるが、ここにこの經典の序分と見なされている部分を抜粋してみよう。しかし慧遠、吉藏、善導がこの經典の序分と見なしている部分はそれぞれ異なつてゐる。これら三者のうちで最も短かい序分は吉藏のそれであるから、まずそれをここに掲げてこの問題を検討してみよう。

如是我聞。一時佛在、王舎城、耆闍崛山中、與大比丘衆、千二百五十人俱。菩薩三萬二千、文殊師利法王子、而爲上首。<sup>(第二)</sup>  
爾時、王舎大城、有一太子、名阿闍世。隨順調達、惡友之教、牧執父王、頻婆娑羅、幽閉置於、七重室內、制諸群臣、一不得往。國大夫人、名韋提希。恭敬大王、澡浴清淨、以酥密和麩、用塗其身、諸瓔珞中、盛滿桃漿、密以上王。爾時大王、食麩飲漿、求水漱口、漱口畢已、合掌恭敬、向耆闍崛山、遙禮世尊、而作是言。大目健連、是吾親友、願興慈悲、授我八戒。時目健連、如鷹隼飛、疾至王所、日日如是、授王八戒。世尊亦遣、尊者富樓那、爲王說法。如是時聞、經三七日。王食麩蜜、得聞法故、顔色和悅。<sup>(第二)</sup>

時阿闍世、問守門者、父王今者、猶存在耶。時守門人、白言。大王、國大夫人、身塗麩蜜、瓔珞盛漿、持用上王。沙門目連、及富樓那、從空而來、爲王說法。不可禁制。時阿闍世、聞此語已、怒其母曰。我母是賊、與賊爲伴、沙門惡人。幻惑咒術、令此惡王、多日不死。卽執利劍、欲害其母。時有一臣、名曰月光。聰明多智。及與耆婆、爲王作禮、白言。大王、臣聞毘陀論經說、劫初已來、有諸惡王、貪國位故、殺害其父、一萬八千。未曾聞有、無道害母。王今爲此、殺逆之事、汗利利種。臣不忍聞、是旃陀羅。不宜住此。時大臣、說此語竟、以手按劍、卻行而退。時阿闍世、驚怖惶懼、告耆婆言。汝不爲我耶。耆婆白言。大王、慎莫害母。王聞此語、懺悔求救、卽便捨劍、止不害母、勅語內官、閉置深宮、不令復出。<sup>(第三)</sup>

時韋提希、被幽閉已、愁憂憔悴、遙向耆闍崛山、爲佛作禮、而作是言。如來世尊、在昔之時、恒遣阿難、來慰聞我。我今愁憂。世尊威重、無由得見。願遣目連、尊者阿難、與我相見。作是語已、悲泣雨淚、遙向佛禮。未舉頭頃、爾時世尊、在耆闍崛山、知韋提希、心之所念、卽勅大目健連、及以阿難、從空而來。佛從耆闍崛山沒、於王宮出。時韋提希、禮已舉頭、見世尊釋迦牟尼佛、身紫金色、坐百寶蓮華、目連侍左、阿難在右。釋梵護世諸天、在虛空中、普雨天華、持用供養。<sup>(第四)</sup>

ここに述べられている經文の内容は、要するに四つの部分に分けられる。第一の部分は、釋尊の說法がどうして成立したかという條件が述べられている。第二の部分と第三の部分とは、まさしく王舎城の悲劇が敘述せられている。すなわち、釋尊の在世に最大の國であつた摩

竭陀 magadha 國の第五世頻婆娑羅 bimbisāra 王の一子である阿闍世 atāśatru は、釋尊の從弟である提婆達多 Devadtra に唆かされて、

父頻婆娑羅を七重の室内に押し込めて監禁した。そこで、王后である韋提希はそれを助けようとして賢明な處置を構じた。しかし、阿闍世はこのことを知り母韋提希を殺害しようとしたが、聰明な月光という家臣に諭され、また醫者である耆婆 Jivaka に止められて殺害することを斷念したが、さらに母韋提希を深宮に幽閉してしまつた。第四の部分は、幽閉せられた韋提希が、人生の極限状態の場に追いつめられ、思い悩み、やせ衰えて、遙かに耆闍崛山にまします佛陀釋尊を禮拜して、縁つて起つた自分の苦惱を打明けている。

ところで、吉藏は何故にこの部分までを序分と見なしたのであるか。この敘述は、結局、阿闍世が提婆達多に唆かされて、父頻婆娑羅を牢獄に閉じ込め、それを助けようとした母韋提希をさらに牢獄に閉じ込めたので、韋提希は苦しみ悩み、ついにその悩みを釋尊に打明けるといふ内容になつている。すなわち吉藏は、韋提希がこの現世において苦惱している状態を述べている部分までを序分と見なしているのである。

次に慧遠は、吉藏よりも少し長い部分（先きに引用した序分の部分は省略）を序分と見なしている。すなわち

時韋提希、見佛世尊、自絕嬰珞、擧身投地、號泣向佛、白言。世尊、我宿何罪、生此惡子。世尊復有、何等因緣、與提婆達多、共爲眷屬。（第五）

ここでは、韋提希は、どうしてこのような惡逆無道の子を生んだの

であろうか。また何の惡因緣があつて、わが子を唆かした提婆達多が自分の尊敬する釋尊の從弟なのであるかといふことを煩悶し、韋提希は身を地に投じ大聲をあげて泣いているのである。

ここは、韋提希が現世の不幸に苦しみ悩んだあげく、自分はどうしてこのように苦しみ悩まなければならないのであろうかと自問して、過去の惡因緣を回想する部分である。これは序分としては極めて重要な部分である。それにもかかわらず、吉藏はどうしてこの重要な部分を切り捨てたのであろうか。それは、一言でいえば、かれが現世肯定を強調する立場に立つて序分の部分を決定したからに外ならない。というのは、もしもかれが現世肯定的立場に立たなかつたならば、序分としてこのように極めて重要な部分を切り捨てて平然としているわけはないからである。しかも吉藏は慧遠よりも約二十年のちの人である。その吉藏が先輩の見解を無視して、敢えて慧遠の序分よりも數行短かくしているといふことは、餘程の理由があつたといふことになる。それはつまり、韋提希が過去の惡因緣を回想する部分は、現世肯定的立場に立つ吉藏からすれば、何ら序分に加える必要がないと考えるからであらう。

これに反して、慧遠が吉藏よりも數行長い部分を序分と見なしていることには、また重要な意味が含まれているのである。韋提希がどうしてこの世において、このような苦しみ悩みをもたねばならないかといふ理由をみずから過去に溯つて反省追求していることは、宗教的見地からすれば、甚だ重要な意味をもつものと言わなければならない。

したがつて、慧遠は少なくともこの序分の區分に關する限り、吉藏よ

りもより宗教的であつたと言わなければならない。

三

最後に、純正淨土教の大成者といわれる善導は、この經典の序分の部分（先きに引用した序分の部分は省略）を慧遠の序分の區切に續いて、次のように定めているが、ここでは便宜上、三つの部分に分けて検討してみよう。

唯願世尊。爲我廣說、無憂惱處、我當往生。不樂閻浮提、濁惡世也。此濁惡處、地獄餓鬼、畜生盈滿、多不善聚。願我未來、不聞惡聲、不見惡人。今向世尊、五體投地、求哀懺悔。唯願佛日、教我觀於、清淨業處。爾時世尊、放眉間光。其光金色、徧照十方、無量世界、遷住佛頂、化爲金臺。如須彌山。十方諸佛、淨妙國土、皆於中現。或有國土、七寶合成。復有國土、純是蓮華。復有國土、如自在天宮。復有國土、如玻璃鏡。十方國土、皆於中現。有如是等、無量諸佛國土、嚴顯可觀、令韋提希見。時韋提希、白佛言。世尊。是諸佛土、雖復清淨、皆有光明、我今樂生、極樂世界、阿彌陀佛所。唯願世尊、教我思惟、教我正受。<sup>(4)</sup>（第六）

先きに述べたように、吉藏が、序分と見なしている部分を内容から見てかりに四つの部分に分けると、慧遠のそれは五つの部分に分けることができる。このように區分すると、ここの善導の序分の部分は第六の部分に相當することになる。慧遠や吉藏が序分と見なしている部分では、韋提希の苦惱する状態が記されており、ここに引用した善導の序分の部分では、苦惱する韋提希がまったく苦惱することのない極

樂世界を願うところが述べられている。すなわち、「ただ、願くば世尊よ。どうかわたくしにこのような憂いや惱みのない世界をお教え下さい。わたくしはそこに生まれかわりたいのです。五濁（劫濁、衆生濁、見濁、煩惱濁、命濁）や十惡（殺生、偷盜、邪妊、妄語、惡口、兩舌、綺語、貪、瞋、邪見）の汚れに満ちたこの世界には永く住みたいとは思いません。この世界には、地獄、餓鬼、畜生が充ち満ちて、よくない連中が澤山住んでおります。世尊よ。わたくしは、これから先き惡人の名まえを聞くことなく、また無道な惡人を見ることのない國へ生まれかわつて住んでみたいと思います。」このように韋提希は苦惱の世界からみずから解脱することを願っているのである。そこで、釋尊は韋提希の切實なこの願いを聞き入れて、佛力をもつて諸佛の國土をみせしめられた。韋提希は、この諸佛國土をみ終わつて、それらの諸佛國土のなかでも、とくに阿彌陀佛の淨土へ往生したいと希求したのである。そうして韋提希は、釋尊に阿彌陀佛の極樂世界を心に想念する方法と佛を觀ることのできる方法について教えを請うたのである。

爾時世尊、即便微笑、有五色光、從佛口出。一一光照、頻婆娑羅頂。爾時大王、雖在幽閉、心眼無障、遙見世尊、頭面作禮、自然增進、成阿那含。

爾時世尊、告韋提希。汝今知不、阿彌陀佛、去此不遠。汝當繫念、諦觀彼國。淨業成者。我今爲汝、廣說衆譬。亦令未來世、一切凡夫、欲修淨業者、得生西方、極樂國土。欲生彼國者、當修三福。一者孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業。二者受持三歸、具足

衆戒、不犯威儀。三者發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行者。

如此三事、名爲淨業。佛告韋提希。汝今知不、此三種業、過去未來現在、三世諸佛、淨業正因。<sup>(5)</sup>（第七）

そこで、釋尊は韋提希の心のなかを見透して、阿彌陀佛の願意を顯現する時期がきたことを喜ばれた。そうして釋尊が微笑されると、その口もとより五色の光りが放たれたという。その光りは監禁されている父頻婆娑羅の頭上を照らし、そのために頻婆娑羅は幽閉された身でありながらも、心の眼が開かれて釋尊を見ることができたという。そこで、釋尊を禮拜した頻婆娑羅は、釋尊の佛力によつて自然に欲界の煩惱を斷ずることができたのである。ここにおいて父頻婆娑羅がまず救済されたのである。そうしてその時に、釋尊はまた韋提希に向つて次のように説かれた。「あなたは阿彌陀佛がこの近くにおられることを知っていますか。あなたはますますに精神を統一して阿彌陀佛の極樂國土を想い浮べてみなさい。わたくしは、あなたがそれを成就するために、いろいろな譬えをもつてその方法を説いてあげましょう。またこれによつてこれから先きに生まれてくるすべての人びとをも、西方の極樂世界に生まれかわるようになしてあげましょう。」これに續いて、さらに釋尊は世俗の善業、持戒の善法、そうして無上菩提を求めめる行業との三福を説かれた。そうして釋尊はこれは過去、現在、未來の三世にわたる諸佛の淨業の正因であることを附言せられているのである。

佛告阿難、及韋提希。諦聽諦聽、善思念之。如來今者、爲未來世、一切衆生、爲煩惱賊、之所害者、說清淨業。善哉韋提希、快問此事。阿難汝當受持、廣爲多衆、宣說佛語。如來今者、教韋提希、及

『觀無量壽經』の序分について

未來世、一切衆生、觀於西方、極樂世界。以佛力故。當得見彼、清淨國土、如執明鏡、自見面像。見彼國土、極妙樂事、心歡喜故、應時即得、無生法忍。佛告韋提希。汝是凡夫、心想羸劣。未得天眼、不能遠觀。諸佛如來、有異方便、令汝得見。時韋提希、白佛言。世尊、如我今者、以佛力故、見彼國土。若佛滅後、諸衆生等、濁惡不善、五苦所逼、云何當見、阿彌陀佛、極樂世界。<sup>(6)</sup>（第八）

これは、善導が序分とみなしている最後の部分である。以上、「如是我聞」の最初からこの部分までを便宜上、八つの部分に區切つて掲げたのであるが、善導は、この經典の序分と見なす部分の内容を三序七緣を立てて説明していることは周知のとおりである。<sup>(7)</sup>

さて、ここに掲げた經文の内容は、これから、釋尊は、阿難、韋提希および未來世において悩み苦しむすべての人びとに對して、極樂淨土とそこに任んでおられる阿彌陀佛を觀察する方法を説かれようとしてゐる。釋尊は韋提希がこのような質問をよくしてくれたものだと述懐して、阿難に對して次のように述べられた。「阿難よ。おまえはわたくしの説く教えを廣く多くの人びとのために弘めてもらいたい」と。わたくしは韋提希や未來世において悩み苦しむ人びとのために、阿彌陀佛の任んでおられる西方極樂淨土を觀察する方法を説きましよう。阿彌陀佛と釋尊の願力と佛力によれば、かの極樂淨土をはつきりと觀察することができる。それはちようどよく磨かれた鏡で自分の顔や姿を寫してみようなものである。このように極樂淨土の美しさをみて心に悦びを感じる事ができれば、その時にすべてのものありのままの相を如實にみる事ができる。さらに釋尊は韋提希に對して「あ

あなたは、もともと凡夫であつて心の想念は弱劣である。いまだ天眼通の智慧を得ていないから、遠い佛の國土をみることはできない。しかしながら、諸佛如來には特別に不思議な力があるから、わたくしはこれによつて、今、あなたに阿彌陀佛の極樂世界をみせてあげましょう」と述べられた。そこで韋提希は釋尊に次のように問うた。「世尊よ。わたくしはいま佛の力によつて、かの極樂淨土を觀ることができませんが、しかし釋尊滅後の未來世に生をうける人びとは現世に苦しみ惱まされて、どうして淨土を觀ることができそうもありません。未來世の人びとはどのようにしたら極樂淨土を觀ることができのでしょうか」と。そこで釋尊はこの韋提希の質問に答えて、極樂淨土のすがた（相）を觀察する方法を説こうとされたのである。

人間というものは、結局、この世においては苦しみ悩む存在である。それで人間は苦惱のない世界を必然的に追い求めることになる。ところが、悲しいことに、人間は自分の力では苦惱のない世界を觀ることさえできない。したがつて、人間がそのような世界を觀て、そこに生まれかわろうとするならば、どうしても佛の力に頼らなければならぬことになる。善導がこの經典の序分と見なしている最後の部分は、このような主旨に基づいて説かれているのである。

## 四

慧遠、吉藏、善導の『觀無量壽經』の序分の區分の仕方は、以上に検討したことで知られるように、それぞれ異なつてゐる。これらの差異はどうして起つたのであろうか。それは、この小論の初めにも述

べたように、經典には一般に序論、本論、結論というようにはつきりとした區分が認められないために、後世の經典研究者が經典を解釋する時に、その經典を理解しやすくするために自己の主觀に基づいて經典そのものを序分、正宗分、流通分というように區分したからである。この經典の序分の長さからいえば、吉藏のが最も短かく、これよりも少し長いのが慧遠のそれであり、最も長いのが善導のそれである。このように、三者がそれぞれこの經典の序分の決定を異にしているのは、かれらの經典の讀みの深淺に關係があるように思われる。このように考えると、この經典の序分を最も短かく區分している吉藏が、この經典の讀みが最も淺かつたことになる。吉藏は、いまでもなく中國きつての卓越した三論學者であり、これに關する造詣は誰よりも深かつたに違いないが、少なくとも『觀無量壽經』の研究に關してはそれほどすぐれた學者であつたとは思われない。吉藏は、初めに述べたように韋提希がこの現世において苦しみ悩んでいる状態を述べている部分までをこの經典の序分と見なしているのである。これは明らかに吉藏が現世というものをあまりにも意識しすぎた結果としての區分の仕方であると考えられる。吉藏がこの經典の讀みがもう少し深かつたならば、恐らくこのような區分の仕方はしなかつたであろうと思われる。

これに對して慧遠のこの經典の區分の仕方は吉藏のそれよりも幾分すぐれているように思われる。それは、韋提希が自分はどうしてこの世において、このような苦しみ悩みを経験しなければならぬのだらうかと深く反省する部分までを序分と見なしているからである。した

がつて、慧遠は少なくとも吉藏に比ればこの經典の讀みは深かつたといえるのではなからうか。

ところで、善導は、慧遠や吉藏よりも遙かに長い部分をこの經典の序分と見なしているのであるが、これは果して如何なる理由に基ずくものであろうか。今まで述べたこの經典の區分の仕方から考えれば、吉藏のそれは現世を意識した結果であり、また慧遠のそれは過去と現世を意識した結果である。このように考えてくると、善導のそれは過去、現在、未來を意識した結果であるということが出来る。一般に佛教ではすべての人は佛になれる可能性をもつていると説くのであるが、善導はこの點をとくに重視して『觀無量壽經』を讀んだのである。善導は、どんなにつまらぬ人間でも苦しみも悩みもない世界である極樂世界に生まれかわることができると説いている。ところが、迷い多き人間は自分の力ではそのような極樂世界に生まれかわることはできない。人間がそこに生まれかわろうとするならば、自分の力では不可能であるがゆえに、どうしても佛の力に頼らなければならぬことになる。善導が『觀無量壽經』の主旨を述べたこの部分までを序分としていることは、かれがいかにこの經典を熟讀熟考してその序分と定めたかということがわかる。善導がこの經典の眞意を體得するため、如何に心血を注いでこの經典を研究したかということは、かれの著『觀無量壽經』の註釋書のなかで、この序分のために精細な註釋を附していることでも明らかである。

## 五

以上検討したように『觀無量壽經』の代表的な註釋者である慧遠、

『觀無量壽經』の序分について

吉藏、善導は、それぞれこの經典の序分と見なしている部分に差異が認められるが、われわれはこれらの序分の區分の仕方を通して、それぞれの註釋者がこの經典をどのように理解し、またどの程度に理解していたかということ容易に理解することができるのである。

(本學講師)

註(1) 釋慧皎撰『高僧傳』卷第三(大正藏經五十卷、三四三頁下)。

(2) 『佛說觀無量壽經』(淨土宗全書一、三七〇三八頁。吉藏はこの經典について「此經、例爲三段、序、正、流通、生起如前、當就序中、有六頁下」とい、その序分を通序、別序と區分して説明している。そうしてかれが「時韋提希、見佛世尊、下三段初章竟」(淨土宗全書五、三四〇頁下)ということばで結んでいることは、その前の「普雨天華、持用供養」までを序分と見なしていることになる。

(3) 『佛說觀無量壽經』(淨土宗全書一、三八頁)。慧遠は序分の區分について「此經始終、文別有三、謂、序、正、流通、從初乃至、世尊(復有)何(等因)緣、與提婆達(多)、(共)爲眷屬、來是其由序」と述べている(慧遠撰『觀無量壽經義疏』、淨土宗全書五、一七二頁七)。

(4) 『佛說觀無量壽經』(淨土宗全書一、三九頁)。

(5) 『佛說觀無量壽經』(淨土宗全書一、三九頁)。

(6) 『佛說觀無量壽經』(淨土宗全書一、三九頁)。善導はこの經典の序分の區分について「從此以下、就文料簡、略作五門明義、一從如是我聞、下至五苦所逼、云何(當)見、(阿彌陀佛)極樂世界、己來、明其序分」と説明している(善導集記『觀經序分義』卷第二、淨土宗全書二、一三頁下)。

(7) 善導は、この經典の序分と見なしている部分をさらに三つの部分に分けている。これは普通三序と呼ばれるが、三序とは證信序(「如是我聞」の一句)、發起序(「一時佛在」から最後の「極樂世界」までの部分)、化前序(これは發起序をさらに分けて「一時佛在」から「爾爲上首」までの部分)である。さらに發起序の内容は七つの部分に分けられて、これは七緣と呼ばれるが、七緣とは、1化前序(本論文の第一の部分)、2禁父緣(第二の部分)、3禁母緣(第三の部分)、4厭苦緣(第四・五の部分)、5欣淨緣(第六の部分)、6散善顯行緣(第七の部分)、7定善示觀緣(第八の部分)である。

